

---

# 狩猟の記憶

K a z u y a

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狩猟の記憶

### 【コード】

N7102C

### 【作者名】

Kazuya

### 【あらすじ】

モンスターハンター2ndがベースです。駄文ですが、僕なりに出来るだけ頑張って書いていきますのでどうぞ読んでやって下さい

m ( ) m

## 折れた翼

広がる雪原

僕は父さんと二人で雪山を登っていた。

雪山草を採取していると、後ろから大きな影が襲って来た。

しまった

不意を突かれた。

僕の武器は双剣。

大したガードは出来ないが、咄嗟に剣をクロスさせて受ける。  
だが当然吹き飛ばされた。

下は、白くて底の見えぬ崖

僕を襲った『者』は、勝利したと感じているのか大きい雄叫びをあげていた。

そして、そのまま僕の視界は白く塗りつぶされていった…

Kazuya「……ん……」

『ゆ、夢…なのか…?』

気がついたら僕はベットで横たわっていた。

Kazuya「……って…ここは…!？」

???「おつ、気がついたか」

Kazuya「君は…?」

目の前には、10代後半くらいの若い男性が立っていた。

???「んー…まあゆつくり休んで。また来るから。」

…何も分からない…こんな状態で下手に動くのも危険だ。  
とりあえずしたがっておこう。

Kazuya「…分かりました…」

わずかに頷くと彼は部屋を出ていったようだ  
体の節々が痛い…

くそ…まさかあんな化物がが後ろから襲ってくるとは…まるで恐竜  
じゃないか…

………  
そうだ…父さんは!?

思い出した。

二人で雪山を登っていたんだった

Kazuya「…じゃあ…やはり夢じゃないのか…」

辺りを見回す…

ベットの横の窓から見えるのは活気に満ちた『村』だった

Kazuya「…ここは…平和なんだな…父さんは無事…だろうか

…『

そのままKazuyaは深い眠りについた

## 光の在所

しばらく寝て体も楽になった

Kazuya「ん…っ」

僕はベットから起き上がると、大きく伸びをして周りを見回した。

青い箱：確かあれは…アイテムボックスか。

今の僕は何の防具もつけてなく、黒く短い服に単パンだった。

恐らく僕の防具も入ってるはず。

僕は父さんにハンターの修行を積んで貰っていた。

雪山草を採取していたのも訓練の内だった。

で、まだ駆け出しハンターである僕の防具はこれだ。

マフモフシリーズ一式。

………防具と言うか、防寒具だね（汗）

それに比べて父さんの防具は凄かった。

父さんは僕の町では勇者のような存在だった。

父さんは、白い伝説の古龍を討伐したんだという。

その白い竜の素材で作った防具だそうだ。

白い竜の名は、ミラルーツ…だとか言っていた。

僕はそんな父さんのようなハンターになりたかった。

いや、なってみせる。

Kazuya「その為には、まずは現在の状態を把握しなくては…」  
と独り言を言いながらアイテムボックスを開く。

あった。マフモフシリーズ。

……………ん？

アイテムボックスの端に、大きなふるしきで包んである何かがあった。

開けてみよう…

開けると、中から白く光を放っている防具が…

こ…これは…

ミラ…ルーツの…装備？

Kazuya「…ば、馬鹿な！ミラルーツは伝説の古龍のはず…！  
それで作った物がこんな所に…！？」

…あるわけない！

となると考えられるのは…

Kazuya「これは…父さんの物なのか…！？」

???「おっ！体はもういいのか？」

急に入って来たので、驚いてアイテムボックスを即座に閉めてしま  
う。

Kazuya「…あなたは…さっきの…」

???「ああ、すまん。まだ名乗ってないな。俺はRubia。こ  
のポケケ村のハンターだよ」

Kazuya「…Rubia…ね…僕はKazuya。ちょっと、  
分からない事が多いんだ。いろいろと教えてもらえないか？」

Rubia「ん？ああ、いいぜ。」

その後、僕はポケケ村の事を詳しく聞き、現在の僕の状況も大体理  
解出来た。

崖から落ちて雪の上に倒れていた僕を、このRubiaがここまで  
運んでくれたんだそうだ。  
そう…僕の隣に落ちてあった『大きなふるしき』と共に…

## 決意

Rubia「双剣持って雪山に倒れてたって事は、Kazuyaもハンターだよな？」

Kazuya「えっ？…まあ、まだまだ修行中だよ」

Rubia「で…これからどうするつもりだ？」

Kazuya「……………」

Rubia「もし…当てがないならここに住めばいい」

その言葉に驚き、Kazuyaはいいのか！？と、目を見開ける

Rubia「ああ、村長にはもう許可をとっている。ただし…そのかわりといっでは何だが、君にはここにいる間、ハンターとして働いて貰う」

元々ハンターになる気だったんだ。断る理由はない。

Kazuya「…。分かった。いや、感謝します」

Rubia「じゃあ、交渉成立だな。そうだ！あとで俺と一緒に狩りに行こうぜ。集会所で待ってるからな！」

そう言つと、こちらの返事も聞かずに部屋を出て行ってしまった

Kazuya「結構せっかちなんだな…」言いながらまたアイテムボックスを開く。

狩りに出るなら装備は必須だ。

ミラルーツの装備…

恐らくは、究極とも言える防御力を誇るだろう。

なにせ伝説の祖竜が素材なのだから。

…だが…

使うのは止めておこう…

この装備を身にまとうには、強くなくてはならない気がする。

手で直に触れると分かる。

この装備の力が。

これは今の僕が身にまとうべき物ではない。

いつか僕が、一人前に…いや、まさに勇者のようなハンターになれた時…この装備を……。

Kazuya「父さん…僕は、このポケット村で頑張るよ」

マフモフ装備を身につけると、双剣・ボーンシックルを持って部屋を出た。

… 集会所に行く為に

## 出会いと出発

Kazuya「…えーっと、集会所は、と…。…。(汗)」

そういえば場所を知らなかった

???「集会所はそこですよ」

Kazuya「…!…君は…?」

話かけてきた声は少女のものだった。

Asuka「私はAsuka。あなたよね?最近雪山から運ばれてきたっていうのは?」

Asukaという女性は、17歳ほどに見え、身長は僕よりやや低めのような。顔は整っており、美しいというよりは可愛いという感じだった。

マフモフ装備をしているが、頭には何もつけていない。それに『ハンターボウ』を持っている。

僕も視界の邪魔という理由で頭には何もつけていなかった。

Kazuya「ああ、僕の力が足りなかった為に不覚をとってしまった。」

Asuka「何もそんな事聞いてないです。むしろ、そんな装備で生きてるんですもん。凄いとすら言えますよ?あのティガレックスに襲われて…」

Kazuya「ティガレックス?そいつが僕を襲った奴なのか。」

Asuka「ええ。確かにRubiaがそう言ってました」

Kazuya「Rubia?僕は今からそいつと狩りに行く約束をしていたんだ。」

Asuka「そうなんですか!Rubiaは私の仲間です。良かったら、私も連れていってもらえませんか?」

Kazuya「…まあRubiaが良いと言えば僕は構わない」

Asuka「ありがとうございます!私、頑張ります!」

A s u k a は嬉しそうに声をはった

A s u k a 「じゃあ、早く行きましよう！」

そう言うとA s u k a は、K a z u y a の手を握り、集会所まで引いていく。

K a z u y a 「な、馴々しい…」

そう心の中で呟いた。

彼女が『集会所』と言った場所に入っていくと、そこにはR u b i a がいた。

R u b i a 「おお、K a z u y a 。遅いぜ！ってA s u k a も一緒か！？」

R u b i a はバトルシリーズ一式と、『骨塊』と呼ばれるハンマーを装備していた。

K a z u y a 「ああ、集会所の前で場所を教えてくださいたら、着いて来たんだ。」

A s u k a 「R u b i a 、私も狩りに連れて行って下さい！」  
さつきからK a z u y a の腕に張り付いて離れないA s u k a 。

R u b i a 「んーいいよ」

A s u k a 「ありがとうございます」顔を輝かせて言う

K a z u y a 「で、今日は何の依頼を受けるんだ？」

R u b i a 「雪山までドスギアノスっていうギアノスのリーダーを狩りに行く」

A s u k a 「む、難しくないですか？」

K a z u y a 「僕は別に構わない。行くぞ」

A s u k a 「えっ！？あつ！わ、私も行きます！」

R u b i a 「よし、じゃあ行こうぜ！」

K a z u y a 「ああ。…その前にA s u k a 。離れる。」

A s u k a もマフモフ装備だ。

当然暑苦しいので無理矢理引き離し、K a z u y a 達は出発した

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7102c/>

---

狩猟の記憶

2010年10月8日11時14分発行